

ご近所パワーで 助け合い起こし

住民流福祉総合研究所

1. あなたの「おつき合い」の流儀は？

以下の項目の中で、「私もそう思う」と言えるものに○印をつけて下さい。

(1) 自分や家族の問題は、まわりに隠しておきたい

(2) 自分のことがご近所で噂されるのはイヤ

(3) 人に助けを求めるのは苦手だ

(4) 人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない

(5) 人のことはなるべく詮索せんさくしないようにしている

(6) 誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている

(7) 困っている人にはお節介と言われぬ程度に関わる

(8) 引きこもるのにも事情があるのだから、
無理にこじあけるのはよくない

(9) お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う

(10) 隣人とは深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている

2. あなたの「助けられ上手」度は？

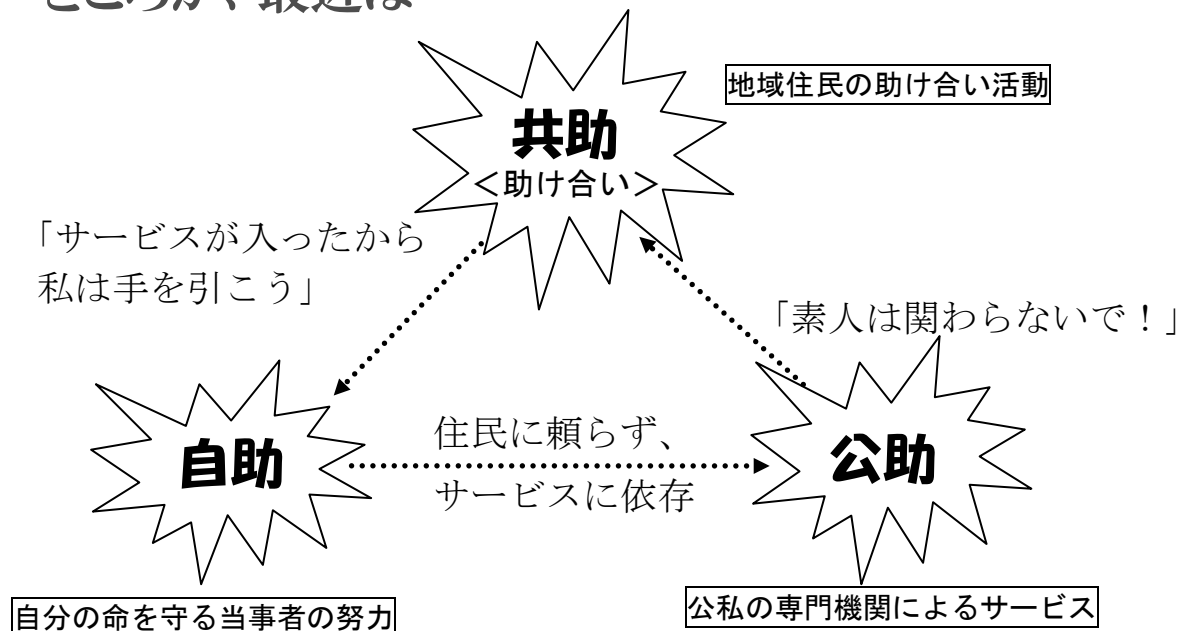
以下の項目の中で、「はい」と言えるものがいくつありますか？

- (1) 自分に向けられた善意は素直に受け入れる
- (2) 助けられたら「すみません」でなく「ありがとう」と言う
- (3) 自宅に他人を受け入れることに抵抗がない
- (4) 「私は認知症」「息子が精神障害」などと周りの人に言える
- (5) 寂しい時は「さびしい！」と声を上げられる
- (6) 気軽に「助けて！」と言える相手を見つけてある
- (7) 頼りになる世話焼きさんをつかまえてある
- (8) 今のうちにたくさん、人に尽くしておこうと思っている
- (9) 助け合いを目的としたグループに加入している
- (10) 所属している趣味グループや老人会で助け合いを仕掛けている

(助け合い)

(1)福祉は自助と共助、公助の協力で成り立っている。

ところが、最近は…



(2)3者の協力関係が乱れ、共助は弱まる一方

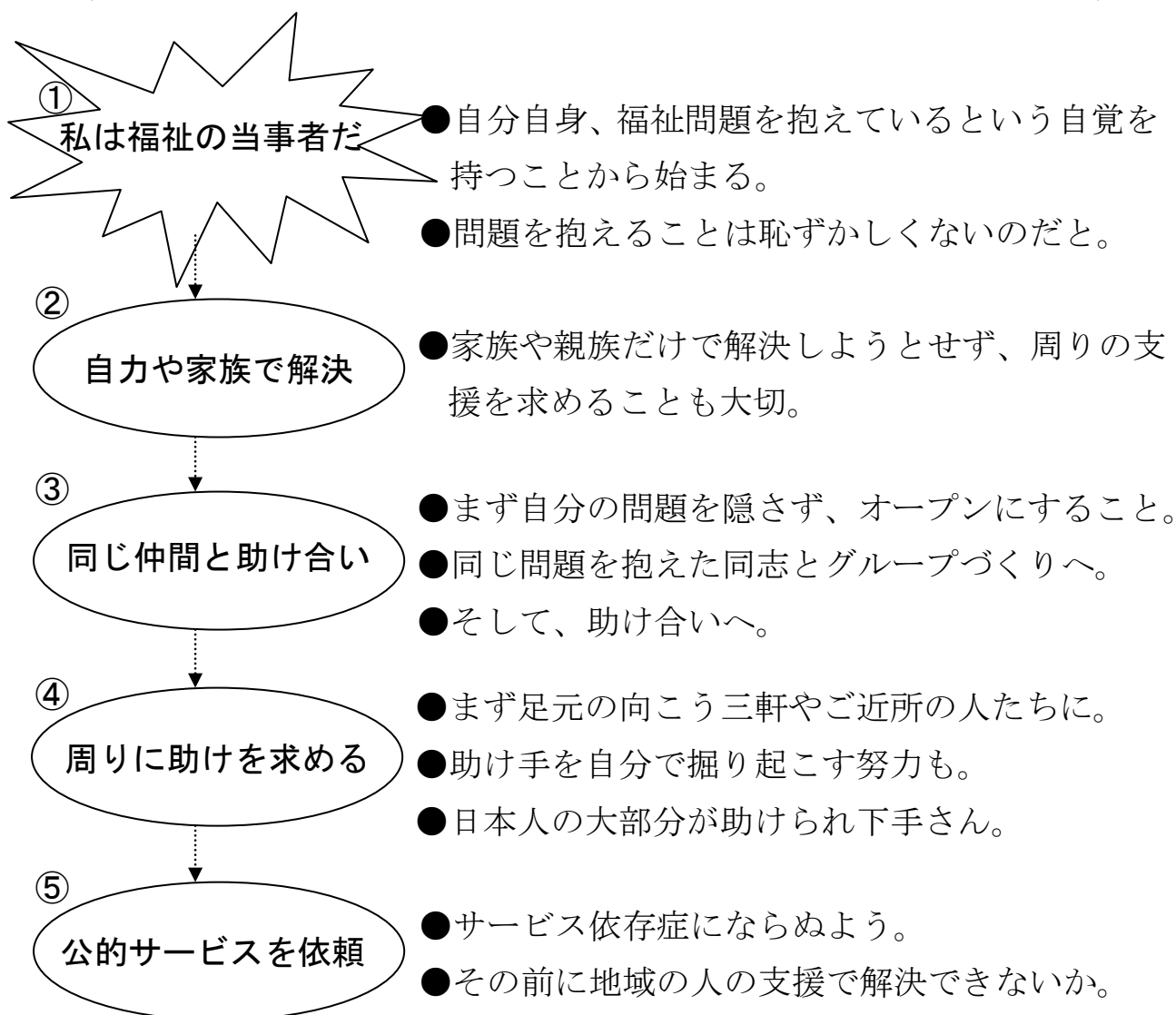
- ①福祉は自助、共助、公助が協力し合うことで成り立っています。
- ②ところが最近は3者の協力関係がちぐはぐになっています。
- ③自助は公助頼みで、共助に助けを求めない。だから共助の出番がない。
- ④公助もサービスに共助の手を借りようとしません。
- ⑤その結果、共助の力は弱まる一方。その分公助がますます忙しくなる。それだけ福祉にお金がかかる。国民の負担は重くなる一方です。
- ⑥協力関係修復のカギは「共助がどれだけ元気になるか？」となります。

1 自助を元気にするために

①本来、福祉の主役は、問題を抱えた本人です。自身で問題解決のために考え、行動していくことから始まります。それを5段階に分けてみました。

②だれもが何らかの当事者です。その自覚が欠けているために、問題を抱えていることを隠したり、支援を求めず引きこもることになり、それだけ担い手がやりにくくなります。

③福祉がうまくいくには当事者が「助けられ上手」でなくてはなりません。



2 共助を元気にするために

1. 「自分はどの圏域で活動するのか？」

- ①一口に「共助」と言っても、向こう三軒の「互助」から始まって、もっと大きな圏域での組織的な福祉活動まで、いろいろあります。
- ②活動のあり方を決めるのは圏域です。地域は5つの圏域でできています。
- ③活動をする人は、自分はどの圏域を担うのかを考える必要があります。
- ④大事なことは、当事者が発信した「SOS！」をすぐさま受け止め、解決するために、それぞれの圏域の担い手が協力し合うことです。

①の圏域

向こう三軒両隣
(5世帯)

- 発生した福祉問題はここでは最もよく見えます。特にそれによく気づく人がいる。
- これを上の圏域にどう伝えるかが難題。

②の圏域

ご近所
(およそ50世帯)

- その問題はご近所の人達で主体的に解決を。
- ご近所は福祉活動の最重要圏域。
- 天性の資質の世話焼きさんを柱に体制作りを。

③の圏域

町内
(およそ3百世帯)

- 問題の発生したご近所まで出向くことが大切。
- 問題を引き取らず、ご近所で解決するように。
- 難しい問題はさらに上の圏域に持ち込む。

④の圏域

校区
(およそ3千世帯)

- ご近所活動をし易い環境作りや町内の後押し役。
- そのために行政や専門機関と連携を。

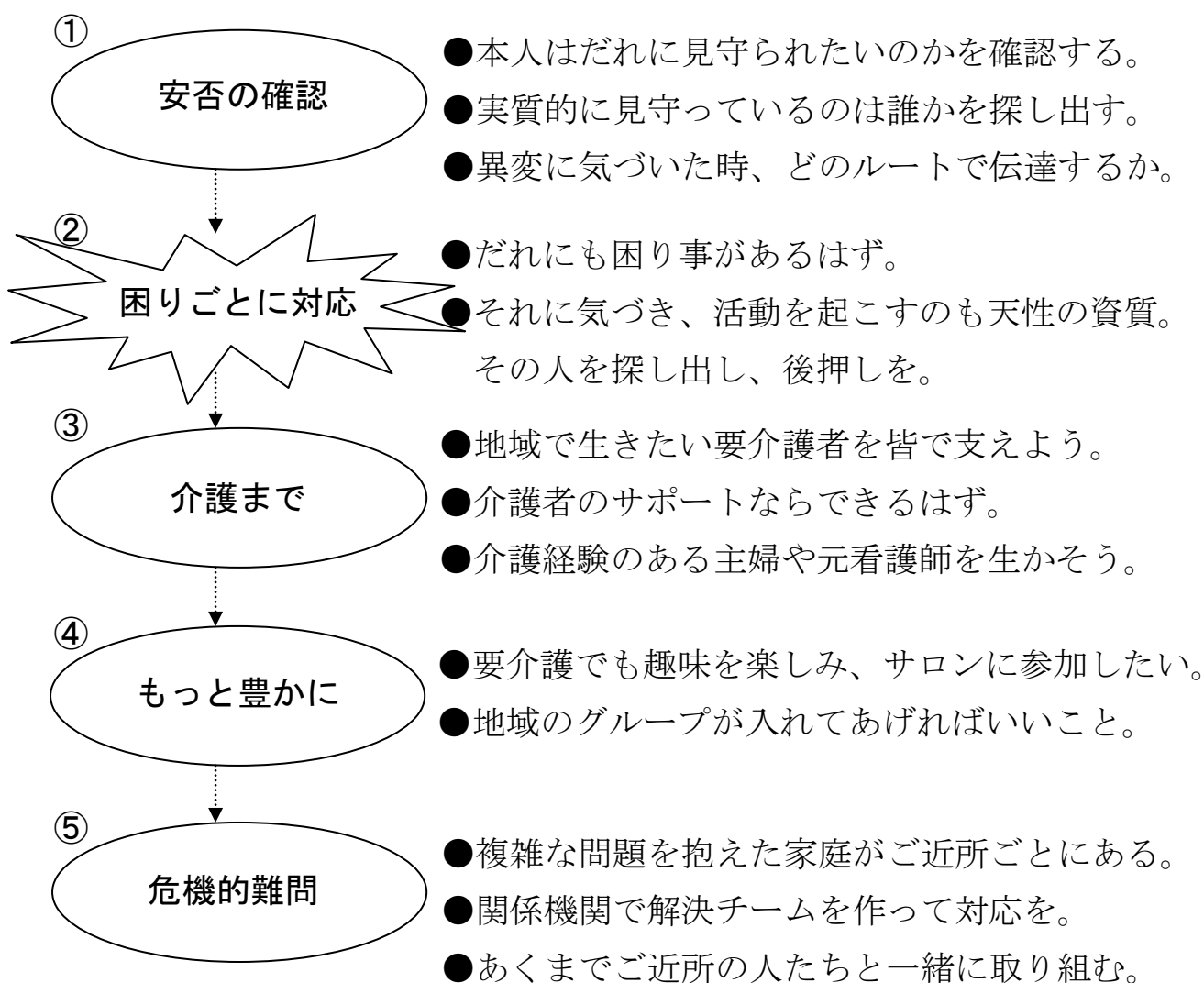
⑤の圏域

市町村
(およそ3万世帯)

- 公私の機関が連携して、共助の応援を。
- 住民の手に負えぬ難問を解決へ。
- サービスを住民の手に返していくことも。

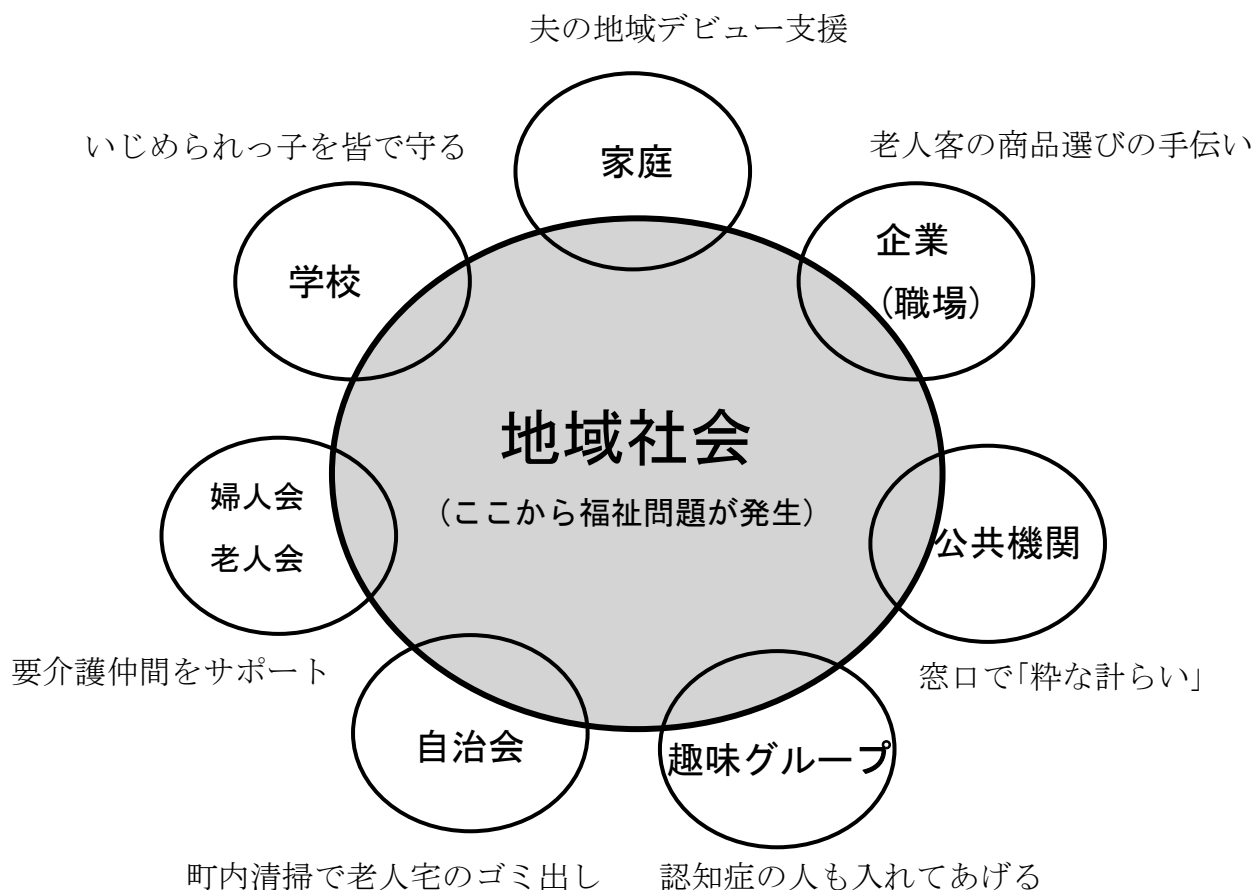
2. 「安否確認」から「介護」まで担わなくては…

- ①介護保険等の施策が整備されて、住民は見守り程度に後退した？
- ②一人暮らしの高齢者にも困りごとがある。まずそこから取りついたら？
- ③介護はプロの領分と割り切らず、「自分たちも担おう」という意欲を。
- ④「自分が要介護になっても地域で生き続けたい」と願うことが先決。そうすれば「今要介護の人を支えよう」という気になる。
- ⑤「求められたら」でなく、積極的にプロの領分に踏み込んでいくこと。



3. 住民総参加の「共助」にするために

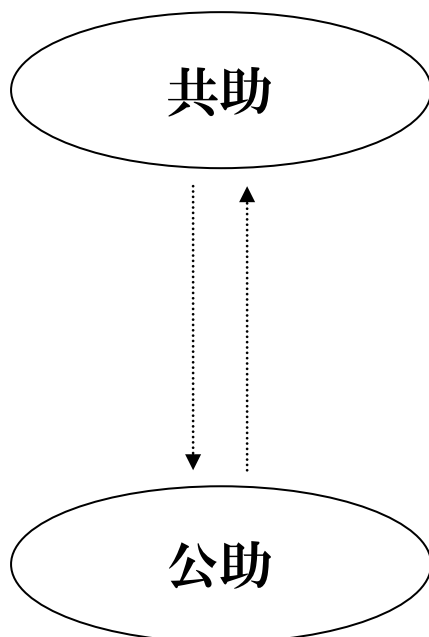
- ①住民総参加の共助にするには、ボランティアのあり方を変えねばダメ。
- ②各自が、生活の接点で、または本業に勤しむ中でできてしまうあり方を。
- ③小さい円と大きな円(地域社会)の重なった部分が地域活動のチャンス。
たまたまそこで出会った困りごとに、その場で関わればできる。
- ④両円が重ならない部分が「身内への活動」チャンス。家庭なら「夫の地域デビューの支援」、学校なら「いじめられっ子を皆で守る」とか。



3 共助と公助が協働するために

1. まず「専門家」と「素人」の垣根を取り除こう

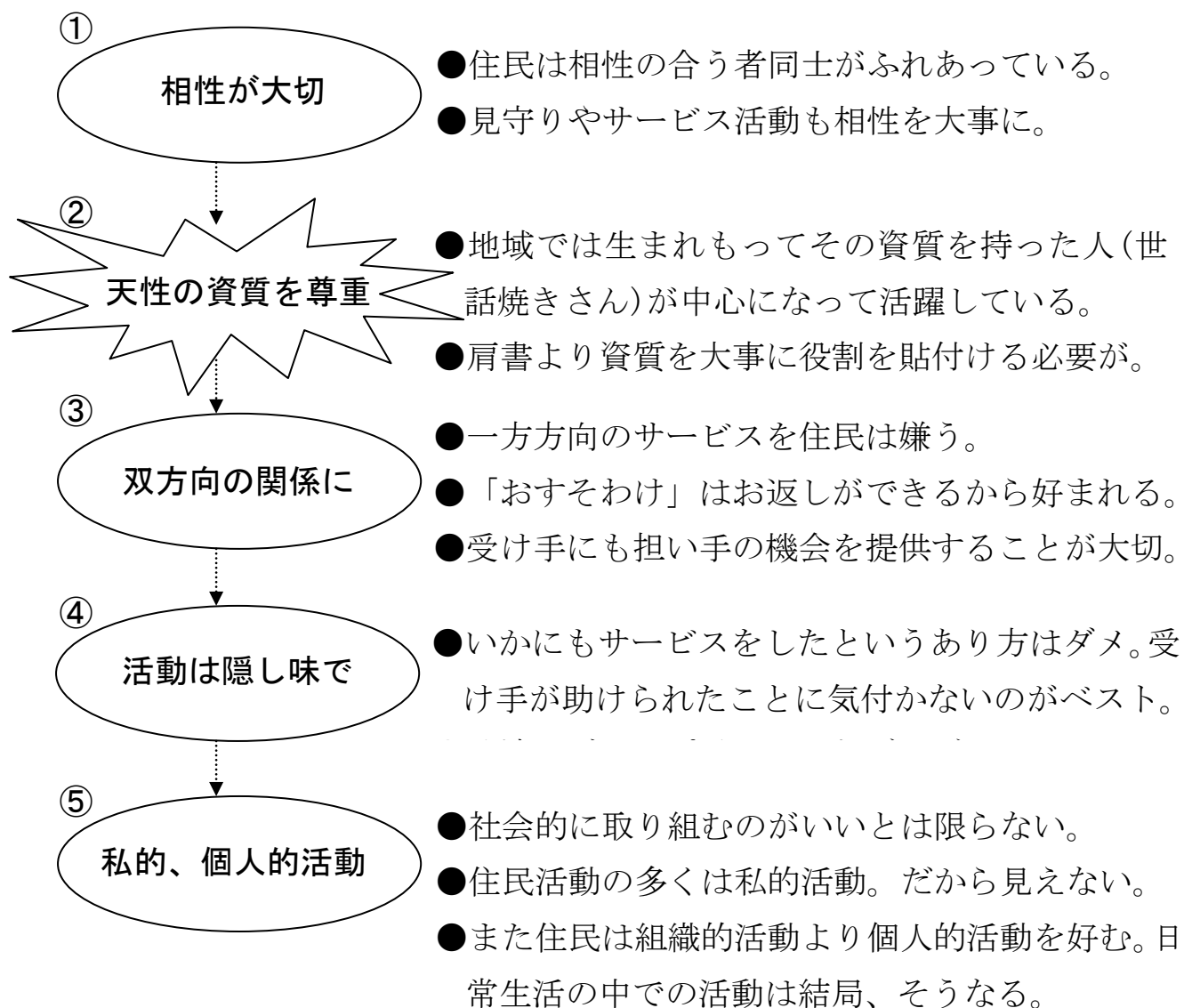
- ①まず「福祉は専門機関が担えば絶対」「住民はあくまで素人」という考えを改めよう。そうでないと「住民と協働」という発想自体が生まれない。
- ②「住民とプロが活動を棲み分け」という考えもおかしい。両者の役割の線引きをするよりも、できるかぎり住民の力を生かすという姿勢が大切。
- ③関係者による「食事サービス」よりも、お隣さんによる「おすそ分け」の方が、住民の感覚に近い。



- サービスが入っている人でも、積極的に関わっていく。
- サービスの対象外のニーズがあるはず。
- 要介護なりに豊かに生きるのを支援するのも活動。その多くはサービスの対象外。
- 個人情報保護の壁を乗り越えて、住民と一緒にケア会議を開催したら？
- 住民と一緒に、支え合いマップづくりをして、住民がどこまで支えられるか調べよう。
- 既存のサービスを住民の助け合いに戻していくのも大切。ゴミ出しまでヘルパーにやらせるようでは、共助は育たない。
- サービスも助け合い型に戻していこう。

2. 住民の流儀を体得しよう。では住民流とは？

- ①見守りをするにも、相性が合う者同士でないと、うまくいかない。
- ②研修をすれば役割を担えるわけではない。天性の資質がモノを言う。
- ③助けられる側からすれば、一方的に助けられる立場になるのはイヤ。
- ④福祉活動はミエミエでやるものではない。何事も水面下で。
- ⑤「社会的」な活動だからいいのではない。各自が私的に実行している。



<付録>

ご近所活動・ニーズ発掘と取り組みのコツ

1. 福祉問題をどうやって**発掘**したらいいのか？

- (1)人々が集まる場では、だれかがさりげなくグチを出している。それに取りつく。
- (2)町内会やJ A、老人クラブでもメンバー特有の福祉問題が出されているはずだ。
- (3)各自の家族内でも、お互いに何らかの悩みを抱えている。
- (4)福祉問題がよく見える人がいる。その人が見つけた困り事に取り組む。
- (5)誰かの困り事を解決するため行動を起こすと、またそこへ困り事が近寄ってくる。
- (6)自分の困り事を気軽に言える人がいる。その人から沢山の困り事が発信される。
- (7)本人が気づいていない問題もある。まわりが推測してあげることも必要。
- (8)「安心安全」だけでは物足りない。要介護でも豊かな生活を送れるのが福祉だ。
- (9)迷惑な人、面倒をかける人をこそ救わねば。福祉は助ける相手に条件を付けない。

2. 福祉問題をどうやって**解決**したらいいのか？

- (1)問題が見つかったら即行動が鉄則。組織を作って等と先延ばしするのはダメ。
- (2)それに取り組むのが一番適している人はだれかを考える。本人が見込んだ人とか。
- (3)自分一人では負担が増す一方。誰と誰に分配したらいいかをいつも考えること。
- (4)助けてもらえば、大切なプライドがつぶされる。だから、①活動はあくまでミエミエでなく、さりげなく、②相手も「お返し」ができるように、心がける。
- (5)本人はどのように解決したかについてよく読んで、対応を考える。
- (6)難しい問題は関係機関と一緒に取り組む。プロが入ったから手を引くのではなく。一つのご近所に2、3件は必ずある。住民の役割も必ずある。
- (7)自分が困ったとき、人に助けを求めることができない—これが助け合いの最大の問題。人に助けてもらうことで、助けられる側の気持ちがよく分かる。だから、活動者こそ人に助けてもらう体験が欠かせない。